



ジャン・デュビュッフェ 《砂丘のアラビア人と荷を積んだラクダ》

「アール・ブリュット」が創作を刺激

厚

塗りの画面を引っ掻いたような絵画。よく見てみないと何が描かれているかはわからない。右にはひとこぶラクダ、左にはターバンを巻いた男の姿が。中央には照りつける太陽も見える。まるで小さな子供が描いた絵のようだ。

画家の名はジャン・デュビュッフェ(1901-85年)。1947年に思い立って妻とサハラに旅した。アラビア語とイスラム教という異邦の文化に触れ、遊牧民(ベドウィン)の奏でる音楽に魅了された。翌年にも再訪し、持ち帰った多くのスケッチをもとに描いたのが本作である。

かねてより精神病者による芸術表現に関心を寄せ、作品も収集していたデュビュッフェは、この年にアンドレ・ブルトンやミシェル・タピエらと「生の芸術協会」を設立する。「生の芸術(アール・ブリュット)」とは、精神に障害を抱えるなどして、技法を学ぶことなく生み出された作品のこと。そこに秘



ジャン・デュビュッフェ
《砂丘のアラビア人と荷を積んだラクダ》
1948年
油彩、カンヴァス
65.2×54.4cm
世田谷美術館蔵
©ADAGP, Paris &
JASPAR, Tokyo, 2016
G0612

められた驚くべき創造性が彼らの創作を刺激したのだ。

1960年、芸術家集団「CoBrA」のアスガー・ヨルンと実験音楽を試み、レコードを発表。速度を変えたテープの音、唸るような声、子供が楽器で遊ぶように、リズムや調性からも解放された自由な音響空間が繰り広げられる。「宇宙のざわめきに、その野蛮なノイズを取り返すこと」と語った、音楽版「生の芸術」＝「ミュージック・ブリュット」は、今日のノイズ・ミュージックの源流ともいえる。



Jean Dubuffet Experiences Musicales
Fondation Dubuffet
2006年(BOOK+CD)
232頁のブックレットは全編フランス語だが、デュビュッフェの楽器コレクションや演奏写真を収める。付属のCDにはアン・リミショーやアスガー・ヨルンとの共演を含む7曲が収められている。

紹介してくれたのは

世田谷美術館 学芸員 矢野 進さん

担当した主な展覧会に、「瀧口修造と武満徹展」、「花森安治と『暮しの手帖』展」、「植草甚一／マイ・フェイヴァリット・シングス」、「東宝スタジオ展 映画＝創造の現場」など。



西條八十 『唄の自叙伝』

「唄」はこうして創られた

度 重なる天災、国内外の悲劇的な事件が毎日のように伝えられる日が続くと、自分がその場にいたら何を思い、どう動くのかと考えずにはいられないことがあります。そんな時に思い出すのは、西條八十著『唄の自叙伝』です。

八十は仏文学者で詩人、そして『青い山脈』『王将』など数多くの流行歌を世に送り出した作詞家です。作詞家としての八十の代表作のひとつ『東京音頭』の誕生は、彼が大正12年の関東大震災で被災し、上野の避難所に逃れた時のエピソードがきっかけだったことが、この書には記されています。

震災の日の夜、避難所では疲労と不安と空腹に皆が沈黙する中、一人の少年がハーモニカを取り出して誰でもが知るメロディーを吹き始めました。すると人々が生気を取り戻し、「ハーモニカの音によって、慰められ、心をやわらげられ、くつろぎ、絶望の裡に一点の希望を与えられた」(本文より)といえます。この光景を目の当たりにした八十は、「俗曲もまたいいものだ」と吹き、「大



『唄の自叙伝』(人間の記録29) 西條八十著、日本図書センター、1997年※底本は1956年生活百科刊行会版。現在入手可能で手に取りやすいのが本書。

衆のための仕事の価値」を見出します。そして、どうせなら故郷・東京のために「東京全市を賑かに踊り狂わせる」唄を書いてみたいと思い立ち、『東京音頭』が生まれました。

『唄の自叙伝』は、「唄」が人びとの支えになることを願って創り続けた一人の作家の、「唄」とともに歩んだ人生の記録です。八十の想いを受け取り、あらためて彼の音楽を鑑賞していただくのもおすすめです。

紹介してくれたのは 世田谷文学館 学芸員 中垣理子さん

世田谷文学館は全館改修工事のため休館※4/21(金)まで(予定)。休館中は、区内小中学校や中央図書館、区民センター、群馬県川場村での出張展示とワークショップ「どこでも文学館」を開催するほか、世田谷美術館での連続講座も実施。内容はHP等で随時お知らせします。詳細は問い合わせを。☎5374-9111 <http://www.setabun.or.jp>